

---

# てふてふ便り

笈川シロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
てふてふ便り

【Nコード】  
N4589H

【作者名】  
笈川シロ

【あらすじ】  
【現在更新停滞チユウ！】主に京都を舞台に繰り広げられる、童顔コンプレックスな主人公と濃い目で愉快的仲間たちのなにげない日常、蝶々に乗せてお届けします！連作短編風日常系で、恋愛要素もちよつとあり？なホームコメディです。（完全に趣味に走っておりやりたい放題してます。また、キャラの言語はほぼ関西弁です。苦手な方はご注意ください！）

scene・1 My sweet home・1 (黒歴史)

京都某所、永遠邸にて。

ローカル番組の司会者だけがしゃべくるリビング。その声が、にわかには響いた地面を踏みしめる様な足音にかき消された。

「おれは成人男性やあああああああ！」

おれ、という割には高めの叫び声と共に勢いよく開け放たれたドアが、壁に当たって悲鳴を上げる。

そんな彼の様子に、ベッドほどもあるソファーに座りテレビを見ていた黒い蓬髪ほうぼうの男性 永遠アキヒは軽く眉をひそめた。……まあ、元が元なので大して代わりはしないのだが。

「アキちゃん！ ただいま帰りましたッ！」

「おかえり。うるさいからあんまり叫ぶなよ」

「うるさい？ よう言うわ、人の話はいつっこも聞かんくせに！」

そのボーイアルトにそぐわしい容姿、だが本人による冒頭の申告通り、その実れつきとした大人である同居人 三ツ矢菜斗みややせいとは目を怒らせ、それでもなお小さな子供が膨れているようにしか見えな顔をアキヒに突きつけた。

後ろで一つに束ねた、男にしては長めの髪をぴよこぴよこと弾ませ、くるくると動く小動物的な仕草は見ていて面白いといえは面白いのだが。

「いや近所迷惑に……」

「なるかい！ こんな馬鹿でかい家でちょっと叫んだところで、反響の仕様がないわ！」

聞く耳持たん、つてか。一応は試みた説得の後、アキヒはやれやれと半ばあきれたように呟き、その柔らかい焦げ茶の頭をぺしぺしと叩いた。

この青年がここに（住み込みの使用人という名目で）住み着いてもうかれこれ一年半、いい加減怒った時の扱い方ぐらいは心得ている。

「……って何してんの！」

案の定しばらくの間されるがままになっていた菜斗だが、はたと我に返るとその手を払いのけた。子供のように扱われ悔しかったのか恥ずかしかったのか、それこそ子供のような頬はひとはけ朱に染まっている。

「で、何事やねんな」

そう促された菜斗は、「そうや、」と改めて話し始めた。

「聞いてやアキちゃん！」

「きーてる。」

My sweet home・1 「マイ・スイート・ホーム」

夕暮れ時。

今日の晩と明日の朝昼と、<sup>鼻屑</sup>鼻屑の作家の新作 最後のは予定外の買い物だが、それらを買ひ占め、菜斗は家路に着こうとしていた。といつても帰る場所は実家ではなく、大阪からは遠い大学に通うための下宿先だ。

そんな菜斗が前を歩く二人の会話に集中していたのは、彼らが話していたのがその現在の我が家の話題だったからに他ならない。

「ふっわあ、すごい豪邸やなあ」

「聞いた話じゃ、永遠グループの社長さんが住んではるんやて」  
彼らが着ているブレザーは、もう見慣れた地元高校の制服だ。

「へえ、永遠グループってあの？ 道理でなあ」

過去に同じような感想を抱いた身として、勝手に親近感が沸き――

人でうんうん肯いていた菜斗だったが、次の瞬間思いがけない台詞に急ブレーキを掛ける事になった。

「オマケに出入りする人間は皆美形なんやと。カミサマも不公平やわあ」

反動で愛用のマイバックが大きく揺れる。

「(な…っ!)」

菜斗は内心悲鳴を上げた。

まず初見で実年齢がそれ以上に見られたことが無いこの外見では、イケメンだのそうでないだのという話は異次元のものであり、下手すれば女の子に見られる(この年で!)事もあった菜斗にとっては鬼門でもある。そんな彼にしてみれば先ほどの一言はプレッシャー以外の何物でもなく。

うああああ、なんでおれ、この家の人間なん!? 悲鳴を通り越して今や半泣きの菜斗である。

そんなことより。菜斗は強引に当初浮かんだ疑問へと意識を向かわせた。『皆美形』という言葉である。

確かにアキヒはあの暑苦しい前髪をどうにかすれば実はかなりのものだが、何不自由ないのいいことに引きこもっているし、社長業が忙しいアキヒの兄は論外。まあもう一人の居候は美形で露出も多いが、そうなるとハタから見た『美形』はこの家に一人しかいないハズなのに、何故前の二人は『皆』なんて言葉を使っているのだ? 思案に暮れている間に、とうとう通用門である。例の学生たちには悟られぬようそこを通り抜けたかった菜斗だったが、何しろかなり焦っており、鞆や袋で両手もふさがっていた。

「ふきやあ!」

結果として、菜斗は盛大にすっ転び、持っていた袋の中身を派手にぶちまける事となったのである。

「大丈夫ですか!?!」

「あ、ありがとお……」

気付いた学生たちが中身を袋に戻すのを手伝ってくれるが、今はその優しさがいろんな意味で泣けてくる。しかもばっちり目エ合っちゃったよどうするよコレ。

座り込んだ菜斗のそんな微妙な表情をどう受け取ったのかは知らないが、一人が立てますか？ と手を差し出した。

「（ええ子！）」

本当に（いろんな意味で）泣きそうになって、菜斗は軽い会釈をし、そそくさと門の中に引っ込んだ。

もともとあまり社交的ではない菜斗は外から見えない位置に移動すると、そのままへたってしまった。

そこまではよかった。

そう、その後の彼らの会話が耳に入るまでは。

\*

「それで？」

「……、つて、」

今までの熱弁が嘘のように菜斗の口が重くなる。

「は？」

「言ったとおりやろつて！ カワイイ娘<sup>コ</sup>やったなあつて！」

親切にしてもらった相手だけに怒るに怒れず、ずっと渦巻いていた怒りや何やらが冒頭で一気に爆発した形である。

「あ……」

納得はしたものの良く分からない様子で、アキヒは間延びした返事を返した。

どう答えたものかと困っているのは明白で、そりゃアンタは女に間違われることなんて無いでしょうよ、まして可愛いなんてと菜斗は八つ当たり気味に独りごつ。

本当はアキヒに話すつもりだったって無かったのだ。それなのにこんな事になったのは。

や、だってこういう時だけ無駄に優しいんやもん。大体、促したんはアキちゃんやし！ あれ、でもそれはいきなりおれが喚いたからで……、

って、

じゃあ結局おれが叫ばんかったらよかっただけの話やんか！

「やっぱいい！ じゃあね！」

「菜斗」

自身の結論に撃沈し、逃げ出そうとすると久しぶりに名を呼ばれる。

振り向けばそこには、いつになく真剣な瞳が。

「今日の晩は福竹のハンバーグがいい」

「へい？ え、いや、そんなん今言われてもムリやし」

あれは朝から解凍しとかな巧くできないのに。そう続けかけたのを

「それと」

とぶった切ったアキヒは、そっちが振ったくせにとむくれる菜斗

の頭を、相変わらずの仏頂面でもう一度ぺしと叩いた。

「お前は男やろっ」

さっきと同じはずのその手は、さっきよりずっと優しい。

「アキちゃん……」

「だって、乳がない」

感動しかけた矢先この男、やっぱり真顔のままそんなことを言う。

「そ、そういう問題……。あ、絶対それまさちゃんの前で言ったらあかんで！」

純情一途にアキヒを慕う彼女が聞いたらおそらく倒れる。

そんでもって確実に思い悩む。

そんな光景がリアルに想像できた菜斗だが、当の本人はいまいち分からないのか何で麻紗の名前が？ と首をかしげている。

「あのなあ……」

まったくもう、なんでこつも分からへんのかな。

ああでも、

「分からへんのがアキちゃんよな」

「なんか言つたか」

「や、別に？　じゃあ夕飯の準備してくるから」

言いつつ台所とはまるきり反対側の、パソコンがある自室に向かう。

三十分で解凍しても美味しく出来る方法なんかあるかねえ？

心の中で、そんなことを呟きながら。



My sweet home・2 (黒歴史)

本当は今頃あの大好きな母校で、  
本当はたくさんの後輩に囲まれて、

素敵な教育実習生ライフ。

「かーせんせーえ、りきや君がどっか行ってもおたー」

「ええ？ じゃあみんな探そうかー……」

「せんせえー、かたぐるまー！」

「んな怖いこと出来るかい！ 北島先生はいないの？」

「いよりにーちゃんはきょうお休み！」

の、ハズでした。

第一希望の高校は定員オーバー。

あみだに負け。

じゃんけんに負け。

拳句論され、たどり着いたのは保育所で。

神様、これはくじ運が悪いうえに頼まれると断れない私への嫌が  
らせか何かですか。

いや、この場合つらむべきは。

(このくそ忙しいときに休みやがったあの野郎や！)

ここはくすのき保育所。大阪よりの京都に位置する、個人で経営している保育所である。

手狭な割に周りがマンションだらけなおかげで預かる子供の数は多く、今回実習先のリストに入っていたのはおそらく人手が足りなかったからだろう。

現在ここで教育実習をしている女子大生 加藤鈴蘭かとうすずらんはただただ自分の運の無さを心の中で嘆きながら、子供こどもたちの遊びにつき合わされていた。

「何なん、何であんなに子供って体力有り余ってるん？」

ようやく解放された頃にはお昼寝の時間となっており、前から薄々感じていた『子供は苦手』という事実を改めて実感しつつ休憩室の扉を開ける。そんな彼女を迎えてくれたのは、先に休憩に入っていたこの年になると大学以外で見るのは珍しくなった同い年のアルバイトだ。

「お疲れ様。加藤さん、平気？ お茶持ってこようか？」

「う、うんお願い……」

働いている長さで言えば先輩となる、亜麻色の柔らかそうな髪と赤縁の眼鏡が可愛い彼女の提案には素直に甘えておく事にして、鈴蘭はほとんど倒れこむような勢いでソファに座った。ほんわかした容姿のとおり優しい人だ。

（それに比べて）

「何でこんな時に限っていてないんよあの野郎」

「ふふ、弥吏君いよちの事？ 急に本業が入っちゃたんだって」

アルバイトは給湯室に行きかけていた足を止め、くすり、と笑ってただの独り言のつもりだったばやきに律儀に答えてくれた。あの野郎、とはもう一人の同い年の先輩の事で、女である鈴蘭が見ても

惚れ惚れする美顔の持ち主である。

名前は北島弥吏。なんかもう、字面からして何かが違うのだ。

「そうよ、ただでさえ男手少ない職場やのに……、って本業？ 保育所じゃないの？」

「あれ、知らなかったんだ。彼、とひ鳶職なの」

それは彼女の高めめの澄んだ声にとても合うとはいえない単語で、思わず上ずった声で繰り返した。

「鳶職う！？ なんやってそんな、」

「そんな？」

逆に訊き返されて、とつさになんでもないよ、とごまかした。

鳶職といえば鈴蘭にしてみれば全く縁のない職業だが、それでも肉体労働で、しかも下手をすれば大怪我ではすまない危険なものであるという事ぐらいは知っている。が、別に鈴蘭も仕事のリスクだのそういうことで驚いたわけではない。

ただ、そんな仕事とあのむかつくほどの端整な顔とがどうも結びつかないのだ。

だってあの細腰よ？

箸より重いもの持ったことありませんみたいなの！

内心憚然とするが、本当は鈴蘭だって何度か彼が子どもを軽々と持ち上げるところを見ている。

それでも、あんないかにも体力勝負な仕事務まるわけが無い。そう思いたいのだ。無理矢理にでも。

一度興味本位でここにきた理由を聞いてみたときに

『子供が好きやから』

と言う答えが返ってきて、至極真つ当で当たり前なそれに、なんだか無性に腹が立った、という事が過去にあった。今思えば、至極真つ当で当たり前なことを一つも特別に思っていないのが明らか

口ぶりが気に食わなかったのだ。

端正な顔で子供の扱いも上手く、お母様方からの評判も良い。

そのうえそれがあくまでサブでただ純粹に楽しむためにやっているものだとしたら、これからを考えれば決してないがしるには出来ないこの仕事に未だに楽しみを見出せない自分は一体なんだというのだ！

そうして結局寺立ちは自身、および元凶である弥吏へと向けられることになる。

\*

ふいに目の前で誰かの手のひらがひらめいて、鈴蘭ははっと我に返った。

「へ、あ、あさくらさん？」

その向こうには少し心配そうな顔のアルバイトがいた。なんか難しい顔してたから、そう言って笑う彼女はもう片方の手に二人分のお茶が乗ったお盆を持っていて、もちろんその間にこちらが大した事を考えていたという訳ではない。鈴蘭は頬が熱くなるのを感じた。

「いやあ、北島と仲良く出来てうらやましいなあって考えてただけ」  
結局弥吏とはどうしても相容れないような気しかしないのだが、

アルバイト 朝倉麻紗あさくらま紗はといえば名前呼びだったり（弥吏にいたっては彼女のことを「お嬢」と呼んでいる）お互いの家を知っていたりして、なかなか良好な関係を保っているように見える。

「そ、そう？」

「そうやん、私未だに慣れへんのに。ええよなあ、…麻紗ちゃんはそうなることやっぱりこちらとしては少し邪推したくなるもので。

「お、同じぐらいここで働いてるからかな、お休みする時とかに結構連絡取りあってるし……」

初めて名前で呼ばれたことよりもこの手の話題はインパクトが大きかったらしい。言い訳のようなものを「ごにょごにょ」に言い始めた麻紗の顔は、こちらが照れるほどに真っ赤だ。

「だからかな？ それに、アキ……さ…行」

尻すぼみになった声からはもう「言い訳」は聞き取れない。

「そうなんや」

この辺りで追撃は止めておく。最近ご無沙汰な甘酸っぱい他人の恋路なんて、こんな楽しそうなものみすみす壊してしまうわけにはいかないから。

麻紗は明らかにほっと表情を和らげ、思い出したように名前呼びで返してきた。

「弥吏君もね、すずら……ちゃん、が思ってるほど完璧じゃないよ？」

「そしていたずらっ子のような笑みを浮かべて言うことには。」

「あの人、結構偏差値高い高校出てるんだけどね？ でも、」

「」

とりあえずは。

「え」

とにかく鈴蘭がとてつもなく驚かされた、という事実だけ、ここには記しておこう。

My sweet home・2 (黒歴史) (後書き)

さらにワケが分からん話になって来ましたね。次は例の美形が出るはず。

そして、注：麻紗ちゃんが好きなのはアキヒさんです。

## 永遠家の人々。

京都某所に建つ豪邸・永遠邸とわの朝は、今日も「彼」の深いため息混じりのあくびから始まる。

\*

「ふわ、はああああ今日は朝ご飯何作ろう……」

まるで主婦のような言葉をつぶやいたアルトの声の主は、別に女性では無い。こげ茶の髪を無造作に後ろでひと括りにしている、れつきとした いや、あまりれつきとした男には見えない小柄な少年だ。

これでもとつくに成人し大学にも入っているのだが、ひよこひよこと跳ねるような歩き方は余計に見た目相応で、二十歳過ぎという実年齢には全くもってそぐわない。

そんな彼、三ツ矢菜斗さいとは、この永遠邸の食事全般を一任された居候である。

「ご飯まだ残ってたっけな、おにぎりが一番楽なんやけど」

独り呟きながら廊下を渡る菜斗がここに住み始めて早一年半。これが職業病なのか、朝起きて真っ先に考えるのは悲しいかな、完全に食事の事になってしまっている。

と、廊下の先に、この家の持主が目に入った。白地に紺のスウェット上下は後ろの少年には気付かぬまま、菜斗と同じ方向 つまり台所に向かおうとしていた。

「アキちゃん」

菜斗は慌てて前方を歩くひよる長い背に声をかけた。

黒い蓬髪の男 アキヒはそこでようやく菜斗に気付き、ゆっくりと振り返る。いかにも機嫌の悪そうなかめつつらはデフォルト

で、その顔にかかる前髪も相当長い。

そして彼はバスバリトンの声で開口一番、こう言った。

「菜斗、今日の朝メシなに」

「……起きてきて早々それは無いんちゃう？」

ああ、おはよう。と歯牙にもかけない男に、菜斗はむきになって叫んだ。

「はいはい、おはようございます！　ちなみに朝食はまだ決まっております、さあ希望はなんや！」

「カツカレー」

「できるかあ！！」

「じゃあよろしく」

「出来んつつつとるやるこの食欲魔人！」

今朝も破天荒な主人にやられっぱなしの使用人なのであった。

\*

ところ変わって永遠邸、ダイニング。

「むぐ…ほんま、あの人の胃イはどんな構造してんねや……」

結局朝食となったおにぎりを軽く二桁ほどたいたらげ自室に戻っていったアキヒの食べ残しを朝ご飯にしている菜斗である。朝っぱらから食い過ぎだのもっと身体を考えるだのぶつぶつ文句を言いながら、それでも自身の好物をパクつく菜斗の耳に誰かの足音が届いた。ドアの方を見れば、チェック柄のシャツを着た背の高い青年がダンボール箱を抱えている。

「三ツ矢、おはよう」



ぱつと目を引く、まつ毛の長い切れ長の瞳に、前下がりに整えられた艶のある髪。そして菜斗と同級とは思えないすらりと引き締まった体軀。

トータルで見ても相当な美形の彼が永遠邸のもう一人の居候、北島弥吏である。

「おはよー。あれ、今日は仕事お休みなん？」

弥吏の本職は鳶職で、それ以外にも色々といたるところで働いたりする。

「そう。しばらく時間あるから、繋ぎのバイト決まるまで掃除でもしようかと思って」

段ボール箱を示すように軽く上に上げて（そんな動作がまた一々絵になる男だ！）そう言う弥吏に、菜斗は素直に感心の目を向けた。炊事なら何でもござれの菜斗も、整理整頓だけはどうにも上手かった試しがないのだ。

「それで三ツ矢、これどうしよう…？」

そう言っただンボール箱から出されたのは、やけに使い込まれた教科書の山である。しかし最近まで使われていたようで、教科書や容れている箱そのものが古びている様子は無い。

「どうしようって言うのは……。あ、捨てんの？」

「そこなんや。」

彼は軽く眉をひそめ、渋い顔になった。∴美形はどんな顔をしても美形である。

「邪魔は邪魔やねんけどなあ、五年も使うと何て言うか、……愛憎が湧く？」

ちなみに一年生×一回、二年生×二回、三年生×二回がその内わけだ。

そして（一応）成人である菜斗と同級のこの青年、「最近」高校

を卒業したという。

「そっかー。……え？ き、北島くん、それ多分違う！ 憎んでどうするんよー！」

なまじそれなりの高校を出ているばかりに分かりにくいが、……要するにこの北島弥吏という青年は、その見た目、あるいは行動に反して二度の留年を経験した、「ど」が付く その、馬鹿なのである。

「そうなんか？」

「うーん、そこは愛着かな」

「字面的には正しいかと思っただんやけどなあ……」

愛しや憎しやといったところが生憎「愛憎」にそんな使い道は無い。いつもの事かと苦笑い気味の菜斗に、弥吏はといえは「他に訊ける人おらんねや、ありがとう」と目をきらきらさせている。

そんな様子にクスリと微笑うと、ふと思いついた疑問を菜斗は口にした。

「アキちゃんには？」

「何言ってるんや。兄さんにこんな情けない所見せられる訳ないやろ」

「……ああそう」

もちろん血のつながった兄弟では無いのだが、弥吏はアキヒの事を「兄さん」と呼んで慕っている。これが弥吏の分からない所で、弥吏の中で彼の存在は何故か相当高い場所にあるらしいのだ。

「う……うん、そうやね！ じゃあこれ、朝ご飯置いとくからっ」

「ああ分かった……、ってあれ、三ツ矢！」

弥吏には悪いが、根っからの文化系人間である菜斗は舎弟気質というモノを持ち合わせていない。

「教科書、どないしたらいいんや……」

当然、菜斗の耳にその眩きは届かなかった。

\*

さて、独り残された弥吏である。

「捨てるとしたら……、新聞のトコよな」

結局部屋のスペース確保の気持ちがり、処分を試みている様なのだがいかんせん知識があやふやで危なっかしい。まあ、未婚男性にしてはマシなところだろう。

「でもなあ、燃えるゴミのような気もするし」

弥吏だつてこれまで色々と体験し（彼の言葉数が少ないのはそのボロを出さないためだ）、自分の頭の出来具合は嫌と承知している。そういう訳で自身の判断能力に対してもあまり期待していないのだ。いや、今回ばかりは珍しく新聞のトコ、つまりは古紙回収で間違つてはいないのだが……。とにかく、自分一人の判断では危険だと考え考え　そして思い出したのだ。もう一人、「こんな事」を気兼ねなく尋ねられる相手を。

いよりはカーゴパンツのポケットから携帯を取り出した。そのまま着信履歴の一番上の番号をリダイヤルする。

「もしもし、朝倉!？」

つづく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4589h/>

---

てふてふ便り

2010年10月9日22時04分発行